

本音一筋

小鹿田焼の第一人者坂本茂木氏が長年執筆していたこの「灯」に、さようならのあいさつをされていた（十日付）。静かな感動を呼ぶ文だった。本音で文を書くことの難しさについてもふれていた。本音を書くということは、根底に本音で生きていることとでなければならぬので、誰人にも難しいことである。

優れた作陶家のあなたは「先生」と呼ばれるのを嫌っておられた。某日蒲江町との親善行事で出かけロクロ回しの実演中、ある女性から「先生」と呼ばれて、つい声荒く応答されたことを後悔されている。彼女は風の強い校庭を「いさぎよく立ち去って行った。あの後ろ姿を私は忘れない」と。その一筋に本音が輝いている。

いつも本音で生きることには至難なことである。でも、それができず自分に反省することはできる。ひとに許しを乞うことはできる。そうすることだからくも本音に繋がっているのである。若き女性はさわやかにぶあいそなあなたの前を去っている。お二人に言葉はなくとも許し合われている。いかにたくさんの人たちが言葉を交わさなく

とも、感応しあっていることか。それだから人生は生きるに値する。

先生呼ばわりを拒否する一つに、義務教育だけの自分の学歴をあげていた。本音がここにも。昭和の最も傑出した禅僧沢木興道は小学四年卒だけ。駒沢大教授にも。「やつと人の気に入ろうと意識しないで生きられるようになるのが七十歳頃からだつた」と言っている。その言行録「沢木興道聞き書き」（講談社学術文庫）一冊を坂本氏に届けたくなった。

（一九九二年七月二十五日）